

A子さんは、3才の時に脳炎になり、そのことが原因で知的障害と視覚障害を抱える身となった。目の見えぬ彼女は、外界から孤立し、一日の多くをトランポリンの上で揺れて過ごし、さらに一日中童謡を聞いた。音楽が無ければ、手を噛み、歯茎が血だらけになるほど顎を叩いた。ADLは全面介助、食事も排泄も着脱も入浴も…全てに多くの支援が必要だった。もちろん発語は無い。

さて、その彼女、あるとき大好きであるはずの入浴を拒否して、職員のどんな誘いにも、床に腹ばいになって全面的な抵抗を示した。職員が、その行動から読みとったサインは、『私は、施設でも帰省した時と同じように、夕食の後にお風呂に入りたい』というものであった。残念ながらその時の彼女の入浴時間は、おやつ後の時間帯であった。

彼女一人のために浴槽が張られ、職員が配置された。彼女は、特別に夕食後の時間帯に一人だけ入浴することになったのだ。一種の賭けだったが、A子さんは、昼間とは打って変わり、ニコニコとして立ち上がり、ご機嫌に浴場まで移動し、入浴が終わればコテンと眠りについたのだ。

そんな夕食後入浴が2回実施され（彼女は2回目もご機嫌で移動し入浴した）、次は再びおやつ後の時間帯での入浴が計画された。

果たして、おやつ後の入浴はどうなったでしょうか？

【予想1】

前と同じように頑なに抵抗を示し、腹ばいになって移動を拒否した。

【予想2】

夕食後の入浴の時と同様にニコニコと移動し、入浴した。

正解は、【予想2】です。彼女は何の抵

抗も無く、入浴したのです。

さて、皆さんはこの状況をどのように解説するでしょうか？

私は、こう解説を加えました。「A子さんは、自分だけのために、職員は勤務時間を越えてまでして、お風呂を用意してくれた。それがうれしかった。そんなに職員の方々が自分の想いを大切にしてくれるんだったら、今度は自分がゆる番だと考えた。だから、たった2回、夕食後の時間に入浴しただけで、以前のように、おやつ後に誘った時にニコニコ移動してくれたのです」と。そしてさらに、職員が忘れてはならない点として、次の言葉を付け加えました。「おやつ後の時間に入浴に誘う時に、それが当たり前のようにっては駄目ですよ。施設というところは気をつけないとそうなりやすいところですから。本当は夕食後に入りたいたのに、この時間に入ってくれているということにいつも感謝しなければ。必ずA子さんには、ありがとうと伝えて下さいね」と。

「この人たちは、一回許せば癖になる」なんて言われて、我慢だけの人生を送っている知的障害・自閉症の方々が、まだまだこの世にはいっぱいいるに違いない。そこで…、

【神話その6】

「知的障害・自閉症者は一回ゆるれば癖になり、元に戻らない。だから甘やかしたり、ルールを変えたりしては絶対にいけない」は神話であり、「どんなに障害の重い知的障害・自閉症者との間にも、ゆるったりゆるられたりの豊かな人間関係を成立させることができる」が真実なのです。もちろん支援の質が高い支援者との関係において、と注釈しておきましょう。